

政治を道徳化から守るために —フィリピンから現代民主主義の課題を考える—

日下 渉

発展途上国に関する優れた著作に与えられる「発展途上国研究奨励賞」（アジア経済研究所主催）も三五回を数える。今年も、名古屋大学大学院国際開発研究科准教授日下渉氏著『反市民の政治学 フィリピンの民主主義と道徳』（法政大学出版局）および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員佐久間寛著『ガロコイレ ニジエール西部農村社会をめぐるモラルと叛乱の民族誌』（平凡社）の二作品の受賞が決まった。去る七月一日、表彰式に引き続き日下、佐久間両氏の受賞記念講演が行われた。今月号と来月号にわたり講演内容を掲載する。

このたび、名誉ある発展途上国研究奨励賞を賜り、身に余る光栄に存しております。本日は本書の簡単な内容と、本には書けなかつたけれども本当はこんなことも言いたかったのだということ、少しお話させていただきたいと思っております。

●新自由主義時代における政治の課題

私はこの本において、フィリピン

ンを通じて現代民主主義の課題について考えようと思いました。いきなり抽象的な話になるので、自由主義の立場によれば、人間とはそれぞれ自分にとってどういう生が「善き生」なのだろうか、それを考えて実現したいと願う存在です。しかし、残念ながら私たちの生は、生まれ持った属性、例えば貧困家庭に生まれてしまうかもしれない、病気を抱えているかもしれないといった、いろんな偶

発性にさらされています。生まれてからも、事故や災害に遭ったり、仕事を失ったりするといった、さまざまなリスクがあります。私たちの生は傷つきやすくもろいのです。これを生の被傷性と呼びたいと思います。そのようななか、私たちは自ら望む生を実現するために、できるだけさまざまなリスクを避けようとしています。しかし同時に、時にはあえてリスクを引き受けるような

決断もします。例えば、私にとっても就職をしないで大学院に行くというのは、とてもリスクのある決断でした。自己責任を課される程度が高い社会ほど、失敗した場合の責任を自分で負わなくてはならないので、冒険的な自己決定をすることが難しいです。そうすると、人生の選択肢がどんどん狭くなっていきます。また、事故や病気や災害といった困難に遭ったときに、自分一人の力だけではそこから抜け出すことも難しいです。しかし複数の人々が、収入、食料、安全、承認といったさまざまな資源を互いに共有し合う、あるいは保証し合うことで、より自由で幅広い「善き生」の追求が可能になると思います。本書の背景には、いかにして相互依存の共同性を紡ぎ出す政治的実践が可能なのか、という関心があります。

かつて先進諸国では、福祉国家を通じて人々は互いに資源を共有しましたが、一九八〇年代以降、その仕組みは縮小化されてきました。他方、フィリピンのような途上国では、福祉国家は不可能です。そのため、日本のような「ポスト福祉国家」とフィリピンのような「プレ福祉国家」は、むき出

しの不平等が一層拡大していくなかで、いかに民主主義を機能させ存続させるのか、という問題を共有するようになりました。民主主義は平等への希望を喚起する一方で、資本主義は不平等をどんどん生み出していきます。この両者の軋轢は、フィリピンでも深刻であり、日本でも今後ますます深刻になるのではないかと危惧しています。

こうした国家の後退を背景に、市民社会が国家機能を補完し、人間の生を支えていく役割に期待が寄せられています。これは、いわゆるトクヴィルの市民社会論で、国家から自律的で、公的目的に貢献し、法を遵守し、自発的に組織化して、信頼と水平的連帯に支えられた民主的な領域として市民社会を捉え、「道徳的市民」に希望を見出します。しかし、グラムシ

の市民社会論によれば、市民社会ではヘゲモニー（知的・道徳的主導権）をめぐる激しい闘争が展開されています。その視座に基づくと、「道徳的市民」という概念が成立するためには「悪しき非市民」という概念も作り出す必要があるため、全ての人間が道徳的市民になることは不可能です。ここから、正しい「道徳的市民」が必要だという主張は、むしろ

社会を分断して、世界観や道徳観を異にする雑多な人々が関与し合うという民主主義の複数性を壊してしまう危険性が浮かびあがってきます。この危険をより深く分析するために、私は道徳政治という概念を利用しました。道徳政治とは、善悪の定義をめぐる政治であって、資源配分をめぐる利益政治と区別されます。利益政治では、資源の配分を調整することにより、ある程度は対立を調停できます。例えば、現状で二つの当事者間に二対八の資源配分があれば、これを四対六にすることでお互いが納得するといった妥協が可能です。しかし、善悪の定義をめぐる政治では、「自分は正しくて相手は間違っている」となるため、妥協は難しいです。他者の正統性を否定する道徳的対立は調停が困難で、「敵」を排除するか破壊するかというところまで行き着いてしまいかねません。

問題にすり替えていく道徳政治です。例えば、仕事が不安定だ、給料が安い、行政サービスが不十分だといった資源配分の問題を、生活保護の不正受給者がいるから駄目だとか、悪しき外国人がいるから駄目なのだとかいった、道徳の問題にすり替える言説です。他者の正統性を否定する道徳政治を批判しているのだから、自己を律するための道徳は否定していません。

道徳政治が台頭してきた背景には、新自由主義の影響があると思います。いわゆる「勝ち組」は、競争し続けるストレスのなか、納税者としての自負心から、福祉やばらまきに依存する貧困層を既得権益層として敵視します。他方で「負け組」も、自らに不遇を強いる社会に不満を抱き、富裕層や外国人、あるいはより下位の人間を敵視します。こうして社会が道徳に分断されていく流れがあると思います。さらにそれを助長するのが、政治家たちが、しばしば「悪しき敵」の脅威と排除を訴えることで人びとの支持を得ようとすることです。政治家は人びとの支持を得るにあたって、かつてのようには配分する資源がないので、ま



必要だという反論をかなり受けました。私もそう思いますが、本書がとくに批判したのは、資源の不平等な配分に由来する諸問題を、「悪しき敵のせい」として道徳の

こうした議論に対して、道徳も必要だという反論をかなり受けました。私もそう思いますが、本書がとくに批判したのは、資源の不平等な配分に由来する諸問題を、「悪しき敵のせい」として道徳の

こうした議論に対して、道徳も必要だという反論をかなり受けました。私もそう思いますが、本書がとくに批判したのは、資源の不平等な配分に由来する諸問題を、「悪しき敵のせい」として道徳の

すまず敵の脅威を訴える道徳政治に依拠するようになっていきます。こうして、ルサンチマンの道徳政治が、資源配分の問題に取り組み利益政治を周縁化し、また民主主義の複数性を破壊しているのではないか、というのが本書の問題意識です。

●分析枠組の提示―「二重公共圏」と「接触空間」―

ここからフィリピンの話に入ります。フィリピンは一般に発展途上国と思われていますが、別の文脈では先進国とも考えられます。フィリピンでは、スペインとアメリカによる植民地主義の下で極端に不平等な社会がつくられ、そこにアメリカによって民主主義の制度が導入されました。そのため、不平等な社会でいかに民主主義を機能させられるのかという今日多くの国家が直面している問題を、フィリピンは二〇世紀初頭から経験してきたわけです。しかも、この隘路を開くための実践と知見も先駆けて蓄えてきました。その点で、フィリピンは先進国ともいえるのです。

ので、エリートが民主主義の制度を利用してフィリピンの富と権力を牛耳っているという理解です。他方で、エリート支配に対する市民社会の挑戦に着目するトクヴィルの市民社会論があります。ここから、「エリート民主主義」対「市民社会」という構図がみえてきます。しかし、本書ではグラムシ的市民社会論を援用して、これらとは異なる見方を提示しました。すなわち市民社会では、「善き我々」と「悪しき彼ら」という道徳的対立が、いかに作られて争われており、それが具体的な政治過程や資源の配分を規定しているのか、という視座です。この視座が有効なのは、社会の流動化が進み、また安定した政党制がないため、確固たるアイデンティティと利益を持った社会集団が特定の政党を通じて競合するといった想定がもはや成り立たないからです。そのため、むしろ「我々／彼ら」という言説がいかに社会集団を定義して作っていくのが、より重要な役割を果たすようになっていきます。

ただしフィリピンでは、「我々／彼ら」を作る言説が生産され流通する領域は、言語、メディア、生活空間の点で、階層的に分断されていきます。そのため「二重公共圏」という概念を導入しました。公共圏を複数的に捉える議論はよくありますが、これは私のワールド調査の経験に根差したものであります。当時私は、フィリピン大学に留学する傍ら、マニラのスラムに住んでいました。スラムでは、ヨレヨレのシャツと短パンと穴の空いたゴム草履をはいて、住民たちと路上で朝から酒を飲むような生活を送っていました。私と一緒に英語に不自由する人がほとんどでしたので、現地語しか話せませんでした。ところが、たとえば大学などに行くと、服も着替えて、英語の新聞や本を読んで英語で議論しなければなりません。同じフィリピンでありながら、全く異なる世界があると痛感しました。そうした二つの世界を毎日行き来することにより、この着想を得ました。

二重公共圏のひとつは、中間層が主に英語で参加する「市民圏」で、「良い統治」「説明責任」「透明性」といった政治改革が支持されます。他方、貧困層が土着語で参加する「大衆圏」では、政治家の「優しさ」や「公平な眼差し」、彼らへの「近づきやすさ」、あるいは貧者の「生活」や「尊厳」などが擁護されます。このように、政治を語る際に使われる言葉と道徳が異なるというのは大きな驚きでした。それから、二つの圏が重なり合うところを「接触空間」と名付けました。そこでは普段は分断されている人々が出会い、支配、抵抗、協働など、さまざまな権力作用が展開される空間です。例えば、さまざまな社会運動、タクシーのなか、海外の移民先の教会といった所に、接触空間があると思います。

●フィリピンにおける道徳政治

本書では、三つの事例を取り上げて、フィリピンにおける道徳政治を分析しました。まず、ピープル・パワーと呼ばれる超憲法的な政権交代要求運動です。フィリピンでは一九八六年に、数十万人もの人々による抗議運動によって民主化が実現されました。この運動をかたちづくったのは、マルコスという「共通の敵」に対抗する「国民」という言説です。こうした言説は、もともと市民圏のなかで生産され、流通しました。しかし街頭デモが広まると、貧困層の人々もやじ馬のように顔を出して、街

頭は接触空間になりました。そこでは、マルコスを追放できるかもしれないという希望と、軍人が機関銃を発射したら戦車が動きはじめたら、皆が一網打尽にされてしまうかもしれないという恐怖の下、階層を越えた水平的な国民の連帯が形成されました。あるフィリピン人は「あれは東の間の団結だった。金持ちも貧乏人も食べ物分かち合って、私たちはみんな幸せだった」と私に語りました。

しかし、この階層を超えた「国民」は、だんだん解体していきます。それが決定的になったのは、一九九八年に映画俳優出身のエストラダが選挙で圧勝して大統領に就任したときです。彼は貧困層からの人気を誇っていて、彼らへの優しさをアピールしました。他方で、市民圏の中間層は、「エストラダのような道徳も知性も欠けたような人間が大統領になれば、大変なことになってしまう」と危惧しました。実際、エストラダは毎晩のように仲間たちと酒を飲んで、豪華な食事をとりながら政策決定をしましたし、腐敗やスキヤンダルもどんどん出てきました。これに対して中間層は、エストラダの退陣を主張する「道徳的市民」

を自ら名乗り、彼を支持し続ける貧困層を非合理的な「大衆」と非難しました。そして、市民圏におけるこの道徳的対立のもと、中間層がピープル・パワー2によってエストラダを追放します。当時の英字紙では、腐敗した大統領に対する道徳的市民の勝利だと盛んに語られました。

しかし貧困層は、自分たちの代表が「金持ち」によって一方的に追放されたと考えました。彼らは逮捕されたエストラダの復位を求めて自分たちのピープル・パワーを起こし、ついには大統領官殿を襲撃します。この背景には、エストラダを支持する「貧乏人」と、彼と貧者を虐げる「金持ち」という大衆圏における道徳的対立がありました。これに参加した人々によれば「税を取られて、警察と軍に苦しめられるシステムを変えたかった」とか、「エストラダが与える」と約束した）土地と家を得るという夢のためだった」と語りました。このピープル・パワー3は国軍と警察によって鎮圧され、死傷者も出ました。このように、二〇〇一年には階層のかつ道徳的に分断された二つのピープル・パワーの応酬によって、民主主義が

深刻に脅かされたのです。

二つ目の事例は選挙政治です。フィリピンの選挙では、有権者の七割が貧困層なので、政治家にとっては貧困層の票を得ることが決定的に重要です。そのため国政選挙では、芸能人などが自らを「貧困層派」だとアピールするポピュリズムが台頭しています。地方選挙では、候補者がスラムで食料や薬などをばら撒いたり、ダンス・コンテストを開催して家電製品を与えるようなドブ板選挙が行われています。

これまで貧困層の投票は、エリートとの垂直的な恩顧主義（クライエントリズム）に基づき、水平的には分断されてきました。しかし一九九八年と二〇〇四年の大統領選挙では、「貧困層に優しい政治」というポピュリストの呼び掛けに応じて、初めて貧困層の水

平的な投票ブロックが形成されます。これに対して市民圏では、貧困層の非合理的な投票が政治的資質のない政治家を選んでしまい、正しく投票できる私たち「市民」は支配されているとの被害意識が高まります。そのため、ポピュリストの当選を恐れて、中間層が伝統的エリートを支持したり、選挙監視NGOが伝統的エリートに有利になるよう不正選挙に加担したり



賞状を受けとる日下氏（左）

しました。英字新聞では、貧困層の投票権を一部制限すべきだと主張する論説も少なくありません。

このように、階層間の道徳的対立によって政治参加が分極化して、選挙に対する信頼が損なわれたのです。民主主義のもとでは、たとえ支持しない選挙結果であっても、その正統性を認める必要があります。しかし、自分たちが道徳的に「正しい」と信じているため、「正しくない」投票によって選ばれた政治家を受け入れられなくなってしまうのです。

三つ目の事例は都市統治です。都市貧困層の生活は、不法占拠や街頭販売といった不法な生存基盤に基づいています。貧困層は都市で生きていくために法律を破らざるを得ない現状があります。これに対して、中央政府のマニラ首都圏開発庁は、不法状態の横行はフィリピンの停滞要因だと訴えて、厳格な法の執行と規律による不正占拠家屋や露店の強制的取り壊しに着手します。

このとき市民圏では、この規律的強権はマニラの無秩序を解消し、法治主義と規律の下で経済発展を実現する試みとして称賛されました。貧困層は救済の対象では

なく、不法行為に既得権益を持つ犯罪者だということです。他方、大衆圏では、困窮した貧困層が市民圏と国家へ向けて、生存と尊厳の権利を主張します。しかし、彼らの声は市民圏では聞かれず、「貧困を言い訳に不法行為を正当化している」と反発を受けます。また国家も取り締まりをやめませんでした。こうして大衆圏では、貧困層の困窮に耳を傾けない政治に対するルサンチマンが深まったのです。

このように、一九八六年に階層を越えた形成された「国民」は、次第に市民圏と大衆圏で互いの正当性を否定し合う道徳的対立が支配的になったことで分断されました。しかし、この対立の図式は、二〇〇一年から始まったアロヨ政権期にまた変化します。アロヨは、社会からの正統性の調達を放棄して、不正や汚職を繰り返しました。そのため、アロヨは二重公共圏の分断を超えて「共通の敵」とみなされ、マルコス期と同じように、「共通の敵」に立ち向かう「国民」という道徳的対立が形成されました。これを背景に二〇一〇年の大統領選挙では、今の大統領であるベニグノ・アキノ三世が、政治腐

敗に対抗する国民の道徳的連帯を訴えて、「貧困層派」を訴えた二人のポピュリストを抑えて圧勝します。

しかし、莫大な土地をもつてフィリピンの富を牛耳る伝統的エリートが、道徳を語って圧勝したことは、ひとつの矛盾を表しています。伝統的エリートが道徳を語ることによって、階層矛盾を突いて貧困層を支持基盤に台頭していく対抗エリートを封じ込め、エリート支配を温存する矛盾です。「腐敗」に対抗する道徳という言葉

は、既得権益層が気に食わない新興勢力の政敵を倒すのに実に有効です。古くはアメリカのCIAが気に食わない大統領候補に対する汚職キャンペーンを行って、フィリピンの選挙に介入しました。最近ではアキノが、ボクシグ・チャンピオンで国民的英雄であるマニー・パツキヤオ下院議員の銀行口座を凍結したり、エストラダの息子を公職から追放したりしています。

以上、民主化以降のフィリピン政治をみてきましたが、ここで二つの道徳政治のパターンを指摘できます。ひとつは「国民の道徳的分断」で、市民圏と大衆圏の双方

で悪しき「彼ら」の排除を訴える道徳的対立が形成されるパターンです。これは、ルサンチマンの蓄積と分極化した政治参加を助長して民主主義を脅かします。もうひとつは「道徳的ナショナリズム」で、正しき「国民」と悪しき「共通の敵」の道徳的対立が、二重公共圏の分断を超えて構築されるパターンです。道徳的ナショナリズムは、「国民」の民主化運動や反腐敗要求を導きますが、「共通の敵」を追放するだけで社会経済構造は温存するという矛盾があります。私はこの二つの道徳政治は、新自由主義時代における民主主義の隘路を反映した、同じ問題のコインの表裏ではないかと考えています。国民の分断が進めば進むほど、為政者や外国人を敵とみなして国民の道徳的連帯を説く言説が高まりますが、実際には国民の分断と不平等を何も解決しません。フィリピン政治は、当面この二つのパターンの間を揺れ動くのではないかと考えています。

●フィリピンで新たな共同性を模索する

昨今の日本でも社会経済的問題の原因を特定の人々の非道徳性に

帰し、彼らの排除による解決を訴える声が強まっているように思います。しかし、社会経済的問題を道徳で解決しようとするのは偽の処方箋であり、社会を分断したり、不平等を隠蔽するだけです。では、いかに政治の道徳化を防ぎ、不平等を改善する利益政治を擁護できるのでしょうか。そのためには道徳的な正しさを声高に訴えることよりも、ろくでもない人間同士が道徳的に反目し合いながらも関係を切らず、互いの生を支え合えるような共同性が必要ではないかと私は考えています。

フィリピン社会には不平等や道徳による分断が根強いですが、同時に互いの生を支え合う共同性も濃密にあります。日本では同調か排除かという白か黒かの境界線が強いのに対して、フィリピンでは互いの悪口を言い合いながらも関与し続けるグレーゾーンが大きいと痛感します。スラムの住民も親戚同士や近所同士の悪口を陰でものすごく言い合いますが、なんだかんだ言って近所や親戚が助けを求めてきたら文句をいいつつも助けるのです。日本では子どもの頃から、「人様に迷惑を掛けてはいけない」、「自立しなさい」という

教育を受けます。他方でスラムの友人たちは、他人にいろんな迷惑を掛けまくるうえに平気で支援を求めてきます。しかし同時に、困った人がいれば親身になって本気で助けようとしています。個人が自立できるといふ考えは、おそらく高度経済成長期のたかが二〇〜三〇年間だけで可能であった幻想に過ぎず、人間はほとんどの歴史において相互依存のなかで暮らしてきたのではないかと感じるわけです。

しかもフィリピンでは、しばしば困難を強いられた者への自発的な共感・共苦が変革の契機となってきました。例えば、フィリピン独立の父といわれるホセ・リサールの処刑から独立運動が拡大しましたし、ベニグノ・アキノの暗殺から民主化運動が始まりました。また海外で死に直面した出稼ぎ労働者への救命嘆願デモも、繰り返し行われてきました。二〇〇四年には、イラクで武装勢力に捕まった出稼ぎ運転手を救うためのデモが展開され、アロヨ政権はアメリカとの関係を悪化させてまでフィリピン軍をイラクから撤兵しました。同時期に日本では、やはりイラクで武装勢力に捕まった日本人に対して自己責任説が流れ、一

人の若者が首を切られて亡くなりました。

本書では対立や分断を強調しましたが、それは私の好きなフィリピンではなかったもので、別の論文で、階層や道徳の境界線を越えた共同性について、在日フィリピン

人社会を事例に書きました。フィリピンでは中間層と貧困層が親密な共同性を発展させる契機はなかなかないので、日本など海外では、現地の教会が、例えば貧しい出身のエンターテイナーの女性と、国費留学生や弁護士といった専門職の人々が出会う接触領域となります。そこで、従来からの境界線を維持する人々もいるのですが、境界線を乗り越えて親密な関係を築く人もいます。彼らの共同性の基盤は何かなと考えると、それは生への被傷性だと思ったりしました。例えば、階層や教育では優位だけでも、同性愛者であったり、若くして乳がんを患いながら異国の地で一人暮らしをする人たちがいる。他方で、貧しい出身で大学も出ていないけど、日本人の夫からDV被害に遭って離婚するなど大変な苦勞をするなかで、日本社会で生活していく知恵と経験をたくさんもっている人が

いる。誰しもが生のだこかでは弱さを抱えているわけで、それが道徳や階層の分断を超えて、互いを支え合う共同性を生み出す基盤になつていると思えました。

彼らの親密な共同性をみていて、人々の苦しみが他者へのルサンチマンに転化することなく、悪しきことをも包み込む相互依存の共感・共苦の共同性を生み出す可能性があるように感じました。フィリピン人の一〇人に一人が海外で暮らしているわけですから、もしかしたら、こうして海外で作られる分断を超えた共同性が、道徳政治の隘路を打開する鍵になるのかもしれない。また日本で暮らす私たちも、フィリピンの人びとのこうした経験から学ぶことは沢山あると思っています。

本日は、ご清聴ありがとうございました(拍手)。

講演日時…平成二六年七月一日
一四・三〇
場所…ジェット口本部5AB会議室